乳がんマンモ検診

精度の高い、ニーズに対応した検診体制の確立をめざして

乳がんによる死亡は年々増え、日本人女性の25人に1人はその一生の間に乳がんにかかる時代になった。このため厚生労働省は、乳がん検診の見直しを行い、「乳がん死亡の低減に有効」とされるマンモグラフィを導入した乳がん検診の指針を示した。この指針にそって、平成13年度から市区町村の乳がん検診で50歳以上の女性を対象にマンモグラフィによる乳がん検診が実施されることになった。さらに今年度からは、日本人女性の乳がん死亡が40代後半から50代後半の時期がピークになっていることから、指針の一部改正が行われ、40代の女性からマンモグラフィによる乳がん検診が実施されることになった。本会では、早い時期から乳がんマンモグラフィ検診の体制整備を行い、今年度からは新たに乳がん検診車を購入して、都内各地域からのニーズに対応している。またこうした環境整備と併行して、検診の精度管理をさらに充実するためにマンモグラフィ読影委員会を立ち上げ、さる7月6日にその第1回委員会を開催した（写真）。

マンモグラフィ読影委員会の開催

マンモグラフィによる乳がん検診（乳がんマンモ検診）が開始された直後の平成13年度から14年度にかけては、各市区町村の取り組みがさまざまであったこともあって、本会での精度管理も読影医を中心として進められてきた。

しかし、各市区町村の検診体制の整備がすすむにつれて受診者数も増加し、これに伴って読影医も増え、精検機関とのネットワークも広がってきたことなどから、関係者が一堂に会して検診の精度管理に取り組む必要がでてきた。こうした状況に対応して、マンモグラフィ読影委員会が発足した。

今回の読影委員会には、本会の乳がん検診を指導してきた島田菜穂子東京逓信病院放射線科医長ら読影担当医5名のほか、本会からは北川照男理事長をはじめ、婦人検診部、放射線部、地域保健部、総合健診部など関係部署のスタッフ20名が参加し、平成15年度の検診成績の報告や、発見されたがんの追跡結果と症例検討、問題になるマンモグラフィの画像（マンモグラム）の読影などが行われた。

平成15年度は4300人が受診し、13人のがん発見

マンモグラフィ読影委員会で報告された平成15年度の本会の検診成績は、次のようであった。

受診者数は4297人。その内訳は20歳台が67人、30歳台661人、40歳台1238人、50歳台1619人、60歳台654人、70歳台54人、80歳台4人で、40歳台と50歳台の受診者が全体の66・5％を占めている（図）。

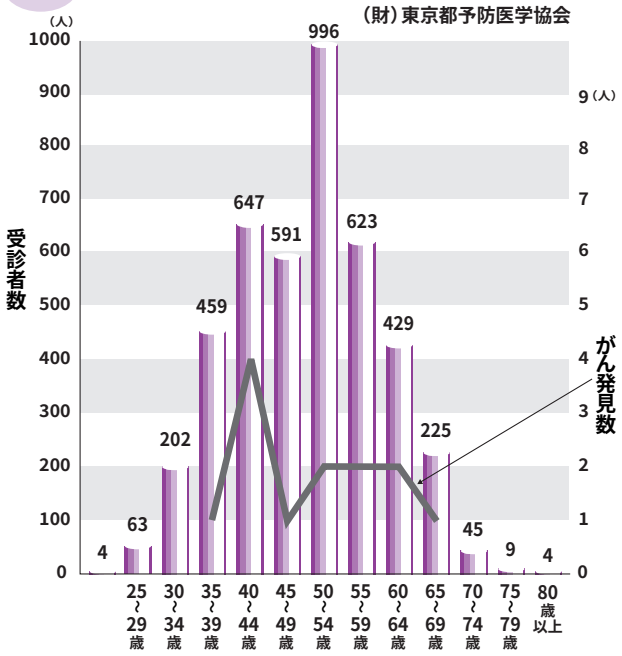
そのうち精密検査が必要であるとか、医療機関の受診が必要とされた人（精査・受診判定）は647人、陽性率15・05％と、昨年度に続いて高い陽性率となった。この647人のうちの半数（53・63％）、347人が本会の精検センターを受診した。

そして、本会の精検センター受診者347人と、他の医療機関で精検を受け、その受診成績の回答があった61人、あわせて408人の中から13人の乳がんが発見された（8月31日現在の追跡結果）。

受診者数に占めるがん発見率を単純に計算しても、女性人口10万対302・5という非常に高い発見率となっている。さらにこの他に、検診の結果「がんの疑いがある」とされた18人については、その精検結果の回答がまだ届いていない状況である。

なお、乳がんが発見された13人の内訳は、30歳台が1人、40歳台が5人、50歳台4人、60歳台3人であったとや、受診者の中にすでに何らかの症状を持っておられる方がかなりあるためで、繰り返し検診を受ける方が増えてくれれば、陽性率も発見率も適切なところに落ち着いてくると思います。

図　年齢階級別受診者数と乳がん発見数（平成15年度）
（財）東京都予防医学協会



検診機関と精検機関を含めた乳がん検診全体の精度管理システムが必要

（図）。

本会の乳がん検診を指導してきた島田菜穂子医長は、平成15年度の検診成績や本会の乳がん検診の精度管理、今後の課題などについて次のように述べている。

「平成15年度の検診成績をみると、やはり14年度と同様、陽性率も発見率も非常に高いと思います。これは、マンモグラフィによる検診が始まったばかりなので、初めてマンモ画像を撮られる方が多いこと、読影が実施されていて、非常に精度の高い検診が行われていると思います。

ただ、画像の精度や読影の精度が高いだけでは検診の精度管理は十分ではなく、『要精検』となった方の精検結果がマンモグラフィ読影委員会にフィードバックされないと、本当の精度管理にはなりません。やはり、検診機関と精検機関を含めた情報の送り方や受け取り方のシステムづくりが不可欠で、乳がん検診全体の精度管理を行う中央管理システムのようなものが必要だと考えます」。

より精度の高い検診をめざして、今後の検討課題は…

また、読影医の1人として今回の読影委員会に出席した畠山雅行奈良先端科学技術大学大学院研究員（放射線科専門医）は、「今回の読影委員会に出席して良かったことは、平成15年度の読影結果とその成績について概略が把握できたことと、読影医間の判定に関する微調整を行うことができたことです」と前置きして、次のように述べた。

「受診者の満足度はどうか、報告内容に関する受診者の理解度はどうかなど、受診者への情報還元サービスをどのように向上していくかが、これからの1つの課題だと思います。また、『要精検』とされた受診者への結果通知報告はこのままでよいかどうか、精検結果の未把握者への対応はどうするか、といったことも検討する必要があると思います。

その他、当協会の乳がん検診成績の経年評価項目をどう選択するかや、乳がん検診のシステム全体の精度管理をどのように進めるか、といったことの検討が今後必要だと思います。さらに、マンモグラフィ読影委員会の継続的な開催と併行して、日常的な症例検討会のようなものが必要ではないかと考えます。そうした場で、精検機関との連携や、病理・細胞診担当者との連携、超音波検査との連携、読影医へのフィードバックなどが行われれば、さらに精度の高い、各地域の乳がん検診のモデルとなるような検診を行うことができると思います」。

さらに高精度・高品質の、受診者からも評価される検診をめざす

乳がんマンモ検診については、検診の精度管理を徹底するために、日本乳癌検診学会など検診関連6学会が立ち上げたマンモグラフィ検診精度管理中央委員会（精中委）が、マンモグラフィを撮影する放射線技師や画像を読影する医師、検診施設の画像の質などについてそれぞれ基準を示し、その基準をクリアした技師や医師、検診施設（画像認定施設）をインターネット上に公開している。

本会は、精中委が示す基準をすべてクリアし、精度の高い乳がんマンモ検診の実施をめざしてきたが、今回のマンモグラフィ読影委員会の開催を機に、さらに高精度・高品質の、受診者からも評価される乳がんマンモ検診をめざすことにしている。